

別にあっていいではないか

毎年、花は咲き、種を作り、散っていく。僕も、あの子も、そんな一輪の花なのか。

そんなすばらしい世界を創造し、この永遠の宇宙を支配する、超自然の存在を、僕は信じ、その存在を、僕は強いて神と呼びたい。戦争と平和、愛と憎しみ、この世の美と醜さに、僕は今まで、真面目に、目を向けることはなかった。アメリカという国、日本という国、世界の国が、それぞれ、今ある、東京や大阪、パリやロンドンのように、単なる地方自治体の形をとり、町と町、都市と都市の間には、何の垣根も、境界のバリアもなく、人が自由に行き交いできる世界を念願する。地球連邦が成立し、その元首、大統領が選出され、世界が一つ、人類が一つになる事を念願する。その時初めて、人類は、地球上の生命の代表として、宇宙に代表者を送れる立場、大人の立場になるのだ。この大宇宙のどこかで、じっと、今まで、僕等を黙って観察していた、高度に発達した生命体が、僕等にその時初めて接触してくるのではないか。それで、やっと、僕等も宇宙人の仲間、大人として入ることができるようになる。それまでは、動物園の猿が喧嘩して傷つきあっても、じっと見ていた僕たち人間のように、僕等を、この地球を、宇宙のどこかで、じっと静観しているのかも知れない。そんな超自然の存在が我々に初めて接触するのは、いつになれば可能になるのだろうか。それとも、もう接触を試みているのに、愚かな人類は気がつかないのだろうか。昔は、キリストとして、我々に接触を試みたとも考えられる。これからも、その超自然の存在は我々を静かに見ているのではないか。全知全能と迄は行かなくても、少なくとも、全知である超自然の存在を僕は信じ、それを神と僕は呼びたい。

取り留めもないままに、思いはあちこち巡る一日だった。